

ニンマ派の教法

—『サムテンミクドゥン』に見えるゾクチョン教義を中心として—

平 松 敏 雄

1. 『サムテンミクドゥン』に
叙述されたゾクチョン教義

ニンマ派の教法は九乘の宗義である。九乘の宗義の中で最も重要なのは、最高乗のゾクチョン・アティヨーガ乗である。中國禪のチベット仏教への影響に関連して、近年とみにその教義が研究者たちの間で注目されてい

る。

筆者は既に他の論文で、十四世紀のゾクチョンの大成者であるロンチヨン・ラブジャヤンペ Klong chen rab byams pa (1308~1363) の『セイの宝蔵』と、前期弘通

ニンマ派の教法

時の敦煌文書の大瑜伽文献に見られるゾクチョン教義について論述した。本論文では『サムテンミクドゥン』*bSam gtan mig sgron*(セイカゼ、rNal 'byor mig gi bsam gtan, 略号 SMG) に記されたゾクチョン教義について考察する。『サムテンミクドゥン』は前期弘通時のスプチハ・サンギヒーHシハ一gNub chen Sans rgyas ye shes の著した論書とされるが、十一、三世紀頃の「理藏書」*gter kha* とも謂われる。もし、そうなれば、時期的には前期弘通時の敦煌文書と十四世紀の『セイの宝蔵』の中間に属し、その時期のゾクチョンを知るために、恰好の資料である。

『サムテン』「クレウ」は体系のむけられた論書である。

諸乗の教法は「眠」 lta ba 「燃」 sgom pa 「火」 spyod
pa に分けて體現せよ。今頃のための分類の體

な「めなべ」、「眠」「修」「行」名々がそれぞれに混在し

てゐる。

「クチハ」の「眠」には九種、「燃」には八種、「行」⁽⁶⁾
には四種及び三種が記載されてゐる。といふのは「眠」のみ

といつてよろしくない。

「眠」の九種とは次のようだ。約178b。

a、 [壇] 食ぐるいし・ [心] 世かくじるまの體
トシルム眠るみ gza' gtad dang bral ba' lta ba
カルキハ・タケーハシト O rgyan Mahārātsa
ムカヒヤトミルム Vimalamittra の御中脳 (SMG,
158b, 3~160b, 1)

b、 田然成魔の眠る lhung gyis grub par lta ba
ガハハムハ dGa' rab rdo rje の御中脳
(SMG, 160b, 1~164b, 5)

c、 大我の眠る bdag nyid chen por lta ba
カトヤローチヤナ Vajrocana の御中脳 (SMG,

164b, 5~172b, 3)

「田然成魔の眠る」は中園神と見らる、『十の御中脳』と
取扱がねどる。中園神由來のものであら。

「大我の眠る」 dge slong ma Kun dga' ma の
作業・努力の體をもととする眠る bya bitsal
lta ba

「一ククタ 'Bud kug ta の御中脳 (SMG, 174b, 4)
～178b, 5)

「大樂の眠る」 bde ba chen por lta ba
ククハシト Ku ku ra tsa ルハニニハハ
Shrisingha の御中脳 (SMG, 178b, 5~180b, 5)

「大腹の眠る」 thing chen por lta ba 480
独一なる大腹の御中脳の眠る thing le chen po cig
dang bral bar lta ba

「御中脳 (SMG, 180b, 5~187a, 3)

「大腹の眠る」 thing chen por lta ba 480
獨一なる大腹の御中脳の眠る thing le chen po cig
gi rang bzlin du lta ba'i lugs
ギーメカムタハーハタクタ Sras thu bo na tsa ha

ta (タロウ) フームカカチャトリヒート sNigas thu
bo ra tsa nyas sti) の御中脳 (SMG, 187a, 3~190a, 5)

d、 1 命諸法を如実な體現する眠る dhos thams
cad gzhi ji bzhin par lta ba, ものこせ 1 命の眠
が捨てておゆる體現する御中脳の大なる體現

眠る mtha' ril ma spangs bral ba'i rang lugs
chen por lta ba

「カトアムハムハ」 なく十々 ハ rgyal po 'Da'
he na ta lo の御中脳 (SMG, 190a, 5~204a, 2)

「おのの九種の「眠」の御中脳の御中脳の御中脳
とみる。

e、 [壇] 食ぐるいし・ [心] 世かくじるまの黒く
いふる、「眞解」 don 「想」 の血肉」 geig gi rang bzhin
「我」 bdag トシルムの御中脳の御中脳。「食ぐるいし・世
かくじるム」 ぬむ、體現する dmigs pa トシルム。「眠」
ふわれてくるが、「修」を説くのである。南宗禪の無
念辯近く。なお、「食ぐるいし」「世かくじるム」という用
語は、「大藏經」所収の初期「クチハ」の體現によつて
ある。前期弘通時からあつた「クチハ」用語の思想である。
前期弘通時からあつた「クチハ」用語の思想である。

教法の派

それは修習者個々人が真理(=法性)を体現したものとなることであり、方法として、瑜伽(あることは、禅定)が重視される。とくに、唯心論では、所取能取の戲論と離れた心の状態、それを心の法性(=心性)と呼び、更に、物の在り方としての法性そのものとする。このようにして他方では、緣起の理法ではなく、心の所現とする人々によって諸法の存在を説明するようになる。⁽³⁾この唯心論的な視点において、一切諸法は心性であり、心性に集まつておる、心性は一切諸法に遍満しており、その根源であるとされる。

大我とは法性(あることは、心性)に他ならないのであるが、その法性が自己に存在すること、他に求める必要がないことを強調するために、大我という用語が創られたと思われる。大我とは如來藏思想一般の用語であり、アーマンを意味する「我」とは異なる。また、一般の如來藏思想⁽⁴⁾「サマターンバクダーン」の大我説の相違は、前者が客塵を否定するのに対して、後者は否定しないことである。大樂(=明知)は自己に存在するものである点から、他に求める必要のないことを説かれる。

大樂の用語は密教的なものを思わせるが、その教義内容は必ずしも密教的でない。とくに、精神生理学を用いた男性原理・女性原理の双入による密教の究竟次第の大樂とは全く異なる。しかし、用語上のみからは密教の影響が皆無とも言われない。⁽⁵⁾

gは、真理が辺 mtha' と云ふべしの「1」が無く絶対的獨一なるものであり、諸法はその獨一なる真理に集まつてゐるから諸法も不二・獨一と見るものである。真理は「獨一なる大我」 bdag nyid chen po geig「本来かの住してくる菩提心」 ye nas gnas pa'i byang chub sems「大樂」「努力と離れた真理」 rtsol ba dang bral ba'i don と呼称されていゆる。1・2・3へ変ひず、ただその不二・獨一なる点が強調されたものである。

た「自生の智」の本性 ngo bo として成仏しており、虚空の光の如く大智 ye shes chen po として血のあらわされてくる rang gsal と説くものである。その説はひとと大差ない。真理が因縁と離れてくる側面が強調されたのみと思われる。「自生の智」はゾクチエンでよく使われる用語である。

eは、一切諸法が本来から法性として「成仏したててこむ」と見るものである。法性であることが完了してくる点が強調される。完了してくるという意味(zin pa'i don)が二十説かれている。他乗の道・果が本来から為されつつてゐると語り、自乘の修として、作為・努力と離れた方法が説かれる。煩惱・障礙が否定されずにそのまま法性として肯定されることは、こと同じであり、ゾクチエン教義の特徴である。また、後代のゾクチエンの用語にみえる「完全解脱」(yongs gro)「血のせぬ」(rang shar) と云う表現が見ひれり。ことに注意したく。eは、業と煩惱と果である苦によつてまとめられる諸法は、血逆 rang bzhin が觀察されるならば無く、置かれるならば何としてもそれらは生じないために、本性

不二については五十九項目にわたつて記されてくる。

大きく分けて次の三種に分類できるように思われる。

1、「顕われ」 snang ba と「⁽⁶⁾」 stong pa が不二⁽⁷⁾。(「顕われ」はマハーヨーガ mahayoga 乗の場合、唯生俗の位相にある神 lha が強調される。「⁽⁸⁾」とは

「顕われ」に自性が無くなるのである。)

2、「異」等が本来から法界に成就してくる、あるいは諸法が本来正覚しており、その点から悟・不悟、解脱・不解脱が不二であるとする。

3、真如(=法界)そのものが、長・短、自・他という相対の二を離れて絶対であること。

1はゾクチエン的に改変されているが、マハーヨーガ乗の不二を受け継いだものであらう。2は中国禪系のものであらう。ゾクチエン特有の「自然成就」や「自らの生む」の用語を用いて発展させられてくる。3は真如に対する仏教一般のものであつ、インド仏教・密教(マハーミーラガ乗)・中國禪を通じて変わらなか。

また、「修」に関するものとして、思念せず縁じない人々によつて、上に降りる thog tu dbab pa ようにな

る、ル記ア(184b, 3~4)。『ナマ達ラ』は「バクチヒン特有の用語である。

「は、戯論 spros pa が一切諸法の血性 rang bzhin であるが、大滴 (=血肉の明か、菩提心) が一切の戯論と離れてゐる」と説く。他乗の極りや十地・道は戯論に過れないと、戯論と離れた大滴の血性を悟る血乘の者は、「」

以下の戯論 gnyis spros の一切諸法を捨てず、縁じなことする。真理の戯論と離れた側面が強調されたもので、大滴は『クンチヒーギル』Kun byed rgyal po (北原 No. 451, 路印 KB) による記載が最も用語である。バクチヒン初期から見られてゐる。

「修」に関して、縁じなこするあることは思せば bsam pa が少いことでも動かなくなつた。「あなたが見ること」 drang por las pa である。それほどよくて大滴の境地の血肉の體へと詰く (187b, 3~4)。大滴と云う用語は密教的なものと思われるが、「あなたが見ること」 から用語は無理を主張する中国禪を想起させる。

また、大滴が大滴を有するる iu thing le drug par ldon pa が記され (189b, 6~190a, 5)、心の活性を六側面から

集・チベット仏教の教法

「」¹¹、戯論しなこじる ma nor ba の側面を強調して、離れてゐる。諸法の真実性 de kho na nyid は非離れてゐるといふと説く。他乗の極りや十地・道は戯論に過れないと、アトイヨーガ・バクペチヒンが最もおもむく

ある。

「」¹²のようだ説がされるが、実際はさへもの絶対のよひだ内容を持つてゐる。それは相 mitshan の累積 rnam grangs の記述によつて知るべし (190b, 1~191a, 1)。

心のよひだ一切諸法の真実性を悟る方満 u'ntu、何をも見ない」「見」が説かれる。見る事 Ita ba po と見られる境 Ita ba'i yul と云う相対する所取・能取 (= 戲論) が無いためである。その「見」の方法は次のようだ図示化される。

1、真理 (=心性、菩提心、法性) は本来からAである。

2、本来からAであるのにおこつて、Aとして見る。

3、心のよひだ見方で見るのである。

Aにはa~hまでの「見」の内容が入れられる。a~

hが分別されて対象化されるおそれがあつため、バクチ

ヒンの「見」が能見・所見のなう「見」であることを重ねて説き直したのである。この方法によつて「不錯誤の眞理」ma nor ba'i don に住する心などやくわんがみる。

また、一切諸法は命名 bla dags と呼んで、客觀的なもの glo bur ba とあると詰く。そして、「如実なる眞実性」¹³は十七の仙詔 tha snyad、¹⁴五十の仙説等から解脱してくると教え。心の自然は a~h に説かれてくるものと大差ない。

最後に、「如実なる眞実性」が「心の光輝・血性」sems kyi rang bzhin' od gsal と表現されてゐる (203a,

5) とある。これは原始仏教からの『般若経』密教、中国禪と洞窟や共通してくる三昧狀態の「輝く心」の圓系統のものである。

11、『チャムトハムクシカ』(路印 SMG)

12、『十つの仙詔』(路印 Dz.D) と銀座
やねだバクチヒン教法の比較

第一は、Dz・D に叙述されたバクチヒン一般の教義として、「バクチヒンの四義 don bzhil」と「眞理の三側面」の教義(筆者命名)がある。

「バクチヒンの四義」とは、「無なき心」med pa 「相々たる心」phyal pa 「自然成就なる心」lhun grub 「独立なる心」gcig pu である。これらの中の「坦々たる心」を除いた他の三つは、SMG の八種の「見」の心やれかと関連づけられるが、「坦々たる心」は SMG にその用語が記載れない。三昧狀態の心あることは諸法を表現したものであり、「修」との関係あるようと思えるが、SMG の「修」の記述どもそのよひだ表現は見られない。

また、¹⁵「眞理の三側面」の教義では、「本性が空」ngo bo stong pa 「血性が自然成就」rang bzhin lhun grub,

おもこせ、rang bzhin' od gsal 「慈悲が圓満」thugs rje kun khyab である。菩提心 (=心性) の三種の「位釋」を表わしたものと思われる。SMG の「見」「修」「行」の叙述においてそれに該当するのかを探らるゝ可能であるが、「本性・血性・慈悲」もまた「ヤヒトの教義

のあとめ方はしてこない。

いれら「回義」²¹ や「三側圓」²² は「バクチョン」「心經」²³ の聖典『クンチューイギルニヨリ』(薩摩KB) にすり記された(23) (ただし、小異なり) ので、前期弘通時からあつた「バクチョン」の中心教義と思われる。いれらの教義のみにっこじば、KB から Dz・D への影響の方が、SMG から Dz・D への影響より深こと思われる。

いじのじみだ、SMG の記述方式の特異性のためとも考へられる。どうやら、SMG は組織された論書であり、各乘を一律に「見」「修」「行」という記述方式で叙述し、それによって各乘の比較を試みてくる。本来、各乘の優劣を比較するために記されたものと思われる。そのため「バクチョン」の章では無理が生じてくる。バクチョンでは「見」「修」「行」が無くとも言われるからである。また、「見」「修」「行」を叙述する場合、教法内容によおいてこなが、論者によって分類記述してくる趣がある。いれは頓門派、マハーヨーガの章に共通した SMG の記述の特徴であり、教法内容によって区別した論述形式を取る Dz・D より著異がある。

の用語が、「界部」の教義の強調点である「血の解脱する」(rang grol, るぬこだ、ただの「解脱する」) から頻出する「心部」²⁴ は「心部」的といふ。しかし、Dz・D は「心部」の記述に限られてこな「心の方面」sems phyogs の語は一度も記されてこない。また、「釋〔心見る〕」²⁵ 譲脱[geer grol](146a, 1~2) 「完全解脱」yongs grol(175a, 4) の語も「心の方面」全く「界部」的でなことは血の解脱する SMG には法界縁起(=「心部」) が説かれているが、法界成就(=「界部」) が説かれてこない。

その他、「血」の明快、置かれず動かずおわれず入る「光明々亮々」であつて、本來からあるおわれず入る「」(rang rig pa ma bshag ma g'yos ma bslad ma zhugs par lhan ne lhong nge ye gsal ba, 30b, 4) が記されてもこない。また、Dz・D の「界部」の「眞実性」の究竟「界」de kho na nyid kyi rab²⁶ byams が「見られたおわれの證法を纏めた明瞭の中で全く執事なく施め放す」yin thog ngos zin pa der cer re lhan ner yeng med chen por glod pa ある「釋脱」の闇轉おわれのおわれ

じのよつて、上段の「教説」に関する限りは、SMG と Dz・D の關係は薄いが、『チアテルグンボ』の系統の記述からいふと、Dz・D の著者のロンチヒンペが SMG を一資本として用いたりは否定できない。そのじみは、上述の「教説」以外の両書の叙述に同一内容のものが多く述べてある。²⁷

第三に、SMG の「バクチョン」Dz・D に書かれる三部のうち、Dz・D の「心部」は Dz・D の如く三部に分けられてこない。三部のうちには属するとの記されてこない。これは SMG の時代(推定十一、三世紀)には未だ三部の分類が出来てこなかつたことを示すが、あるいは、SMG が三部の分類の形式範疇に入らない論書、例えば、三部共通の典拠となる論書であることを示すものと思われる。

第三に、SMG の「心部」は Dz・D に書かれる三部のうち、Dz・D の「心部」にあたがり属するものであるが、いずれの部の教義に最も近いものであるのかが問題となる。

「教説部」は後述するような理由で除かれてもよくなれば、「心部」の教説の強調点をわざる「血の解脱する」。

以上のじみかん、SMG の「バクチョン」教法は少なくとも「心部」「界部」にあたがり属するものである。そのうちの「心部」は後代に生起・究竟圓次第に学んで分類されるたるものであると観察され、形式的な面が多分に認められるからである。従つて、この時期には「界部」が「心部」から独立していなかつたところがわかる。また、SMG の引用文献から見るど、「心部」の聖典が多い。

第四に、SMG の「バクチョン」教法と「教説部」の教法と比較してみると、「教説部」で最も重要な精神生理学的教義(「ムカゲル」thod rigal の裏臍といながらの)が全く欠けてこない。いじのじみだ、SMG の成立時には、まだ「教説部」の精神生理学的教義が創られていないなかつたが、あぬこだ、SMG が「教説部」に属する論書ではないことを示す。前説であるならば、「教説部」の「部」としての成りは SMG の成立以後ところなる。

また、SMG の「バクチョン」教法は、アビシニアカ、諸

慈悲神 Iha と変える觀想、基・道・果を説かず、実踐上は全く密教的なものを持ててこな。」の「心・界部」 SMG の「バクチ²¹」が「心・界部」に属するものである」とを裏づける。

第4章、SMG の「バクチ²²」教義には、Dz・D と記されてくる唯識教義による説明が全く無く、Dz・D と記述された唯識教義の用語の一部は敦煌文献にも見られ、その影響は前期弘通時の「心・界部」からあつたと照ねれる。しかし、それをもとめあげたのは Dz・D (おほくば、その「教説部」) にないトからであらう。また、Dz・D の八識説はイハニバ、唯識派の第七識が欠如してくるところ独特なものであつ、『楞伽經』を経て取り入れられたものと思われる。SMG やハの唯識教義の影響によるものが全く説かれないと、SMG の「バクチ²³」が唯識より唯心教義に基いてくるのであるといふを示す。それは SMG の「バクチ²⁴」が中国禪を基礎としてくるいふをいかがわせ(30)。

第4章、Dz・D と記せられてくる、法性を悟れば諸法は「涅槃の法」になり、悟らなければ「輪廻の法」になると

こう教義は、筆者の見た範囲では SMG においてゾクチ²⁵の章には記されず、マハーモーガの章に記されてい(31)。この教義は敦煌文献においても中國禪(あるいは、ゾクチ²⁶ハム)と融合した密教マハーモーガに見られる。

「心・界部」から、後代大成期に「バクチ²⁷」の教義として Dz・D に取り入れられたと推定する」とも可能である。第七章、SMG が「見」「修」「行」「温暖」と分けて説くんだ、Dz・D やは「心・界部」を覗むれなし。「教説部」の一部「見・修の温暖の程度によって障礙が除かれてゆく」 lta sgom drod tshad kyi geegs bsal ba 「闇藏と顯出の仕方で詰めゆく」 gab pa mngon du phyung ba'i tskul du bka' stsal ba と「観」「行」「暖」「暖隱」が開説される。SMG の「暖隱」と「動く」gyo ba 「舞る」 thob pa 「跳躍なれり」 brtan ba とこれら四段階に分けられた記述(SMG, 234b, 1)があるが、それが Dz・D とみ取らざるじふくむかた、論述様式に於いて SMG が Dz・D の「教説部」の記述と関連があると極めてないが、その論述様式はその当

時一般の論述様式とも考えられない。また、「トプテルグハ」によれば、ハネルの「教説部」の教義は前期弘通時からあつたことになり、その点から SMG の記述様式との一致は不思議ではないのである。その部分の Dz・D の論述内容と SMG の記述内容との比較考察は今後の課題となる。

以上、SMG の「バクチ²⁸」教法は Dz・D の「心・界部」に属するものであり、「教説部」ハハニヤの精神生物学的教義とは関係が薄いことを結論としてくるのがやあ。

III. 「チャートハミクシカハ」(SMG) と 叙述された禪門派、マハーモーガ、ゾクチ²⁹ハノ教法の比較考察

先づ、SMG を叙述せたるに従つて III 乘の差異・優劣点を考察しよう。

禪門派は「不生であつ空であらぬ離縫」 don dam pa'i bden pa strong pa ma skyes pa (SMG, 31b, 3) お題いじゅ、「不³⁰」 gnyis med pa 要題など。マハーモーガ派は「不³¹」の真題」 gnyis su med pa'i de bzhin nyid

(SMG, 30a, 6) と題するが、「自然成就」 lhun grub を悟ふなど。「バクチ³²」・アヒヤコーガ派のみが「自然成就の真如」 lhun rldogs de bzhin nyid (SMG, 30b, 2) とくは「自然成就の慈悲」 lhun gyis rldogs pa'i chos nyid (SMG, 11b, 5~6) を悟るのである。

禪門派は一切諸法が本来から生じてこない、即ちあるのみ悟る。「悟」を顯ねる snang ba にはなれないと申す世俗諸法の意味を證めなさのである。衆生利益や神祇のヤンダラ (SMG, 32a, 1~2) が等閑視される。この「悟」 gzung sku の世界が否定されてしまうのである。

次に、マハーモーガ派の優位点である「不³³」について考察してみた。マハーモーガの「観」の「不³⁴」

と「観³⁵」 gnyis su med par lta ba (SMG, 32b, 4~5b, 5, 11b)・ゾクチ³⁶ gnyen dPal dbyang と禪門派に種々の不³⁷が記せられてくるが、根本的には世俗と勝義の不³⁸とがとあるが、世俗には顯われ・有・多・生

等、勝義には空・無・一・不生等が属する。世俗は中觀で、而して唯世俗の方に強調点があらむに思われる。頗る

派の如く諸法が本来から生ぜず別であるのみならぬ、顯れり「空」であり世総・勝義不二の菩提心、⁽³⁾ いは二諦が無別なる真如 bden pa gnyis dbyer med

pa'i de bzhin nyid (SMG, 11b, 5)、事物と空が不二の真如 dngos stong gnyis su med pa'i de bzhin nyid (SMG, 83a, 4) である。真如が不二の空に

は、諸法をその真如であり不二であるとするいふことだが、諸法が空・不生のみといふ空刃に墮さなこのやあ

る。長尾雅人教授の説く「二諦の簡別性とは異なる意味をもつ。アヘーラーが派で」のように不二が主張されるのは、頗われの世界、色身の世界が空の世界と同じほど重要視されるためである。それは密教の生起次第の観想法(=諸神現出)から必然的に導かれる主張であるが、既述した如くインド系仏教の般若・大悲の説とも結びつくものである。

第二に、バクチヒン派の優位点である「自然成就」について考察しよう。一切諸法が「法界」あることは「自生

なる清淨郷の界」rang byung gi ye shes rnam par dag pa'i klong (SMG, 30b, 2~3) とある。除けられたる無

く本来自心地あるわれて、自然成就してくるが、Ihun gnyis rdzogs pa やある。これがアヘーラーが派の

生起次第、神の御身 sku 等をハルマカの出現せしと利益をなし努力するに付する批判から、自ら成就してくるに付する批判を含まれる。アヘーラーが性起・法界縁起であるのに付して、バクチヒンは

法界成就を説く。アヘーラーが色身の「位相」における教義であるのに付して、バクチヒンは法身の「位相」

shar と「解脱する」 grok の二側面の教義に関して語れど、アヘーラーが「のぼる」、バクチヒンは「解脱する」などの強調点がある。かつて、筆者がバクチヒン教義の基調は「解脱する」の側面にあると言ったことが、

SMG のとの記述から裏付けられる。さて、三乗の差異点(優劣点)は以上の如くであるが、

頗る派とアヘーラーのバクチヒンとの影響部分あることは共通点を次に考察してみた。

まず、頗る派に付いて。実践に関しては頗る・無努力・無分別を標榜する頗る派がバクチヒンに影響を与えたことは否定できない。教義と闘争する SMG の頗る派の「見」の結語の部分 (SMG, 72a, 4~b, 1) が記され、そこには「やの他無^ハバクチヒン教義となる。また、用語「な、「^ハな^ハ」 drang por 真・修^ハ」、「^ハな^ハ」 (SMG, 62a, 3~4) 「^ハな^ハ」 drang por bsam (SMG, 64b, 4) 「峠」 yin pa 「峠」 ma yin pa (SMG, 65a, 6) 「^ハな^ハ」 ngang (SMG, 74a, 3~4, 75b, 1~2) 「^ハな^ハ」 rang rig pa (^ハな^ハ「血識^ハ」) 等がバクチヒン共通である。その関係の深むを認めた。

次に、アヘーラーと闘争する SMG のアヘーラーはインド密教生起次第と異なる要素が併もれてゐるので、問題が複雑になるが、^ハな、「見」を考察しよう。「見」の別説に四種が記される。1、方便と般若が「^ハな^ハ」黒^ハ心眼^ハの thabs dang sites rab gnyis su med par lta ba

ナハナハアキハナハ Sangs rgyas gsang ba の御住持 (SMG, 99b, 3~100b, 6)

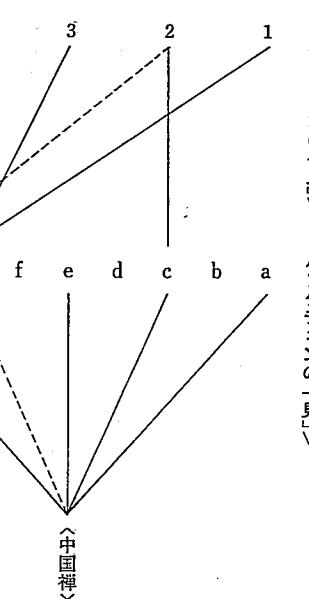
2、大我^ハ眞^ハ bdag nyid chen por lta ba か
△・ペルシヒ sKa ba dPal brtsegs の御住持 (SMG, 100b, 6~102b, 4)

3、^ハナム^ハ眞^ハ gnyis su med par lta ba (SMG, 102b, 4~105b, 5)

4、平等性^ハ眞^ハ manyams pa nyid du lta ba
△・アム^ハアム^ハ Padma dang Ma dus du の御住持 (SMG, 105b, 5~108a, 4)

それでは内容を説明するに付して省略するが、内容の差異はともかく、それらの呼称の上からのバクチヒンの「見」の比較である、次頁の図のとおり。

この比較から、バクチヒンの教義には^ハや^ハの如く明かに中國禪から影響されたものと存続するが、内容の如くにアヘーラーと共通のものと並んである。このことについては、SMG のアヘーラーがバクチヒンの道影響を受け成立したのであるためか、あるいは、○



(実際は点線よりも両者の関係が深い)ことを示す。また、^d、^e、^fも内容的には中国禪と共通のものを示す。マハーヨーガに関しては、教義内容から言うと、^a～^cのよう多く

のものと結合せねば。

の大我の教義は如來藏思想一般に共通である。マハーヨーガも「禪時」のもの「cig car pa」が記されている。前者は密教生起次第、後者は中国禪やゾクチンによる共通のものである。このことは SMG のマハーヨーガが中国禪（あるいはゾクチョンとも）と融合したマハーヨーガであることを示す。

インド成立の本来のマハーヨーガ幻化網 *sgyu phrul dra ba* は、教義面ではともかく、実践面ではゾクチンに全く影響を与えたかったと考える方がよいようである。

SMG のマハーヨーガの「修」に関しては、「漸次のもの」 *rim gyis pa* と「頓時」のもの *cig car pa* が記されている。前者は密教生起次第、後者は中国禪やゾクチンによる共通のものである。このことは SMG のマハーヨーガが中国禪（あるいはゾクチョンとも）と融合したマハーヨーガであることを示す。

四、結語

SMG は現在のリヒャ派の最高権威者 *Dud'om Chökyi Drubpa*⁽⁴²⁾ *bDud 'joms Rin po che* が重要な四種の論書として挙げてゐるうちの一つである。SMG によれば、上述の如く、ゾクチョンは実践面では全く中国禪的であるが、その教義面の成立に、中国禪と並んでマハーヨーガの影響を推測することが可能である。しかし「不」の教義に関してである。

しかし、SMG は、その著者の中国禪・マハーヨーガ・ゾクチョンの教法に対する理解の仕方によって書かれしたものである。SMG の著者のそれぞれの教法に対する取捨選択があるうし、流派による偏りもあるう。時期的な制約（推定十二・三世紀）もあるう。その点に注意する必要がある。

例えば、意味の差異はともかく、「不」の用語は中國禪にもあり、既述した如くゾクチョンの「不」にはマハーヨーガからの繼承のみとは言えなく「不」もある。また、マハーヨーガの中心聖典『サンカルニヤ』⁽⁴³⁾ *Sang ba snying po* や敦煌文書のマハーヨーガ文献 VP. NO. 454 には「自然成就」 *lhun grub, or lhun*

註

(1) 九乘の宗義について、拙著『西蔵仏教宗義研究第三卷』東洋文庫、1982（以下略号「西蔵宗義3」）pp. 8, 131～132。
(2) 『西藏宗義3』
(3) 『講座敦煌』「敦煌のタントラ經典」大東出版社、未刊

- (36) おお、SMG の記述をみると、シクシク多くの唯識説の導入が、マハーミーダ（あるいは、中国禪と混じたマハーミーダ）を導じてなされたと想定すれば、早計に過ぎる。あらかじめ慎重な考察が必要である。
- Dz.D の唯識派に対する軒依説批判といつては、「西蕃宗義」p. 48。如来藏思想の軒依説といつては、「宗義」p. 758 『輪藏經義』pp. 169, 206, 『古典藏題事典』著林社、第1版 1977, pp. 144~145 参照。
- (37) Padma 'byung gnas 《「現」」の翻訳についても (SMG, 97a, 4~b, 3)。たゞ、「禪圓」は、「禪圓」から「圓滿」が訳されたことによる。これは、「圓滿」pp. 27~28.
- (38) 『西藏宗義』p. 37.
- (39) 『西藏宗義』pp. 40~41.
- (40) 『西藏宗義』pp. 41~42.
- (41) 『西藏宗義』p. 88, VI—註 4, 7, 10. p. 99, VII—註 1.
- (42) SMG 《Preface》に記述する所によると、然、中國禪による翻訳がある。
- (43) SMG 《Preface》に記述する所によると、然、中國禪による翻訳がある。
- (44) 著者、*gSang ba sbying po* (北京 No. 455) 《6-1-7. 嫌十川書 6-1-6~6-3-5 之類五十九。大智、『西藏宗義』p. 38. 参照。
- (45) 『西藏宗義』p. 37
- (46) 清末のチベット伝来は確かなもので、したが、洲洲釋迦の「自然成就」を類似した教義があくまで見られる。『西藏宗義』p. 35.
- (47) 『西藏宗義』pp. 36~38. 「歎嘆々々」参照。
- (48) 《大正四〇年二月・東京大学・大英博物館蔵チベット